夜中の一時過ぎ。まくら元の電話が鳴った。「子供のために、土下座しても家族のもとに帰りたいんです、センセイ」

子育てを巡っての姑（しゅうとめ）とのいさかいで、家出したフィリピン人花嫁からだった。昨年春、山形大病院内に「異文化外来」を設置、花嫁らを精神面でケアしてきた。学生時代、バッグ一つでアジアを放浪した経験を生かしている。年末から週一回、日本語教室を受け持ってからは、悩みを訴える電話相談で熟睡出来た夜がない。

嫁不足の東北の農村が、アジアの女性を迎え始めて八年。村挙げての行政主導と、民間のブローカーによる仲介で、その数は山形県内だけでもフィリピン、韓国、中国などから約二百五十人にもなった。

が、ここに来て花嫁を金で買う感覚に対する批判に加え、言語、生活習慣、宗教などの違いから問題が一気に噴き出している。特に十二月から二月までの厳冬期を、関係者の間では「魔の三カ月」と呼ぶ。

「問題は相手の文化や性格、生き方に関心を持たない夫たちにある。拒否するだけで、受け入れないんです」

三月一日、東京・日本青年館で行われる「結婚と農村の再発見」シンポジウムで、花嫁の悩み、識字、医療について話す。

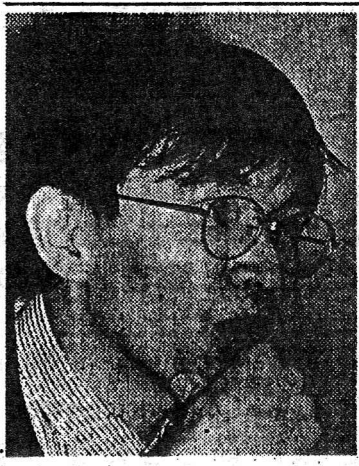
アジア人花嫁問題だけでなく、行動の幅は広い。数年来、タイの難民キャンプへ通ったり、湾岸戦争直後のイラクにも飛んだ。二月にはカンボジアを訪問、難民の帰還問題で「慎重さを」と国連当局に提言した。非政府組織（NGO）の代表や、地元ラジオのニュース・コメンテーターもこなす。

（松本逸也）

92/2/25 朝日

農村のアジア人花嫁の悩みを正面から受け止めている精神科医

桑山紀彦（くわやま のりひこ）さん



ひと

63年、岐阜県生まれ。山形大医学部付属病院勤務。精神神経科医。インドシナ定住難民もケア。90年より地元ラジオ局「ドクトル桑山の地球歩き」レギュラー。29歳。